

諸魂庵

黙想の家

建設進む

春の訪れを待って、諸魂庵建設が開始されました。昨年、雪がくるまでに敷地の埋め立てを完了しておきたかったのですが、土石が足りず春に持ち越しになってしまいました。傾斜地にあった田畑4枚を一つの敷地に、10トンダンプで300台余の土石が必要となりました。石地組始め、地元の土建業者の皆さんのご協力でどうにか4月に完了、6月に入って洞さんの協力で基礎工事が始まりました。生コン40㎡のとてつもない、がっしりとした基礎となり、解体・移築の準備完了となりました。

解体・移築の工事は宿と同様、地元古川町の柳組が担当して下さい、ネパール旅行で一緒だった、柳組専務の忠さんが助けて下さいました。

解体の下準備の仕事は大変なものです。天井裏に積もったほこりの厚さは、そのままその家の歴史を物語っているようでした。ドンと一突きすれば爆弾が落ちたかのように、もうもうとしてしばらく何も見えず。担当大工の森田さんの顔は、炭鉱夫のように真っ黒で目と歯だけが異様に白く、お互い相手の顔を見ながら笑いころげる始末です。家に帰って鼻をかめば、いつまでも黒いものが出てきました。こんなに汚れる仕事はそうそう誰もはやってくれません。古家の解体・移築は、技術的にも、建物への愛情の面においても、50才代の大工さんが最後の年代のように思います。携わって下さった大工さん達に、心より感謝したいと思います。

解体作業中、大黒柱の上部よりすすけて柱の一部になってしまっていた「棟札」が発見されました。実は以前にも棟札が出てきて、それには「享和三年」（1804年）と記されていました。しかし新たに発見された札には「宝永元年」（1704年）と記されていました。徳川8代将軍吉宗の時であり、富士山のコブ山、宝永山ができたころに建てられたものです。290年という我々の常識を絶する時の長さ、私はことばを失ってしまいました。と同時に、このような古いものに、ない袖を振って建ててよいものだろうかと、一瞬迷いを感じました。

神社、仏閣ならいざしらず、民家で300年といえば、役割を終えて死んだも同然のもの、しかし、それがまた新しい生命に蘇るならば、これぞ「諸魂庵」にふさわしいと思い、建てることに腹を決めました。

6月27日、小雨の中、片町勝朗さんが一人で建て始めました。柳組とは28日の約束でしたが、「今日は日がいい」と彼はいて一人で柱をたてていました。その日は「大安」、そんなことは無頓着な私、仏滅だろうと何だろうと構わないのですが、勝朗さんの気持に感謝し、一緒に手伝いました。

6月30日、棟は上がりました。一番大きな梁は四間半通し（約8m）、重さは90kgありました。300年経ってこの重さだから、当時は2トンあったと思います。今日でこそクレーンで苦もなくあげられますが、当時はどうしてあげたのでしょうか。昔の人たちの気迫が伝わってくるようでした。とにかく、ばか大かい梁が組み合わさり、棟が上がりました。

柳組さんの仕事はここまで、後は勝朗さんと私と二人で、根気に建てて行くという算段、この方式だと雨の始末さえ完了すれば後は建設資金と相談しながら無理せずやれるのです。しかし、家づくりは大人のプラモデルのようなもの、一つできれば嬉しくなり、早く出来上がった姿を見たいと、中毒症状に陥るのです。そこへもってきてあの夏の天気、そんな訳で諸魂庵づくりの建設の毎日でした。

おかげ様で7割近く完成、少しは見れる状態になってきました。完成すればあぶらむの働きに大貢献してくれることでしょう。明春の完成が今から待ち遠しい今日このごろです。

～諸魂庵建設募金のお願い～

建設の総工費は、1500万円を見込んでおります。

現在までに、あぶらむの会を支えて下さり、すでに天国に召された方々のご遺族からいただいたご寄付を中心に蓄えてきた700万円と、諸魂庵建設募金としてご寄付いただいた380万円の建設費用を用意することができました。これらのお金は、すでにここまでの建設費用として支払い終わっています。

そこで、いつもいつも皆様方にお願ひばかりで心苦しいのですが、残り約400万円について今一度、皆様方のお力をお貸しいただきたいと存じます。

口座番号は以下の通りです。

郵便振替
名古屋 0-88065
あぶらむの会

